

研究ノート 小林多喜二の国語教師・渡辺卓のこと

尾西 康充

文学に目覚めるきっかけを小林多喜二に与えたのは北海道庁立小樽商業学校（小樽商業高校）の国語教師・渡辺卓であったといわれている。庁商時代の級友への聞き取り調査をおこなって『小林多喜二伝』（論創社）を執筆した倉田稔氏によれば、多喜二は、当時校内で「卓さん」と呼ばれて生徒たちの間で人気があつた渡辺から大きな影響を受けていたという。また手塚英孝氏も、渡辺は作文の時間に二、三の推薦作を読みあげるのを例としていたが「多喜二の文章はいつもその選にはいつていた」とする（『小林多喜二』、新日本出版社）。

渡辺は一八九〇年一月四日、三重県一志郡川合村須ヶ瀬（津市久居須ヶ瀬）に四男として生まれた。藤堂藩が嗣子断絶による改易を防ぐために設けた支藩・久居藩の藩士を先祖に持つ三重県士族の家柄であつた。三重県立第一中学校（三重県立津高校）、神宮皇宮学館本科（皇学館大学）を卒業した後、一九一六年四月に小樽商業学校に赴任した。中学時代、裸馬に乗って学校に通つたり、通学の途中で人夫と喧嘩をして校長先生に仲裁してもらつたりと、どうしようもない腕白青年であつた。この

ときの校長は作曲家弘田龍太郎の父正郎で、弘田とは中学校の同級生であつた。

小樽商業学校本科一年の一九一六年六月、当時一四歳の多喜二は「健康の必要」という作文のテーマを渡辺から与えられ、公園のベンチで結核患者と健康な者との対話形式の文章を書いて大いにほめられた。ざつくばらんでユーモアにあふれた教師の人柄に魅せられて文学の世界に興味を抱くようになったといわれている。

型にはまらない性格の渡辺は小樽時代一本杖スキーの腕をあげるのと同時に、芸者と共に三曲合奏（三味線と琴、尺八の合奏）で舞台に出演して校長から大目玉を喰らつた。このときの校長は黒沼義介で、手塚氏は彼を「学生の自治と自尊を重んじ、形式的な風習を無視して、教室や職員室、校長室など校内いっさいの建物に標札もつけさせず、新年の訓話などもただ『おめでとう』というかんたんな挨拶ですますというふうだった」と紹介している（前掲書）。立場や境遇によつて人間を差別しない、ひとたび決心すればかならず行動に移すという渡辺の気質は黒

岩校長のものと一脈を通じるものであり、またそれは万難排して田口タキを酌婦の苦境から救い出した多喜二の精神に受け継がれている。

この後、渡辺は一九一八年八月に新潟商業学校に転任する。そして秋田商業学校のつぎに五島列島に移動し、さらに久留米高等女学校、豊津中学校と転動し、一九四〇年には戸畑高等女学校校長に就任する。この間、一九二〇年六月二十九日に津市万町の商家の娘杉山郁子と結婚して息子二人娘三人をもうける。義父惣七郎は三重県議会議長を務め、津市内にあった同和地区の解放に尽力した。渡辺はいつもユーモアに満ち、食卓では文学に関する興味深い話題が尽きなかったという。古典文学の研究に励み、『訳註万葉集女性の歌』（一九二九年一月、關書院）を上梓している。また校長らしくなく、校庭の植木の手入れをしていると来客に小使と間違われることもあった。人からどう見られようが一向に構わず、真の自由人として生きた。

多喜二が「戦旗」防衛巡回講演会のために伊勢・有楽座を訪れたのは、地元新聞の報道によれば一九三〇年五月二〇日とされる（伊勢新聞、五月二二日）。入会権をめぐる朝熊闘争の指導者で、植木等の父・徹之助が開会の辞を述べようとするや否や臨監警官から「中止」され、多喜二をはじめ伊勢出身の江口渙、片岡鉄平、貴司山治、徳永直の講演も「弁士中止」が連発された。会場には「神宮皇学館学生を初めプロ文芸愛好青年約二〇〇名」と「婦人の聴衆も一〇名位」が集まっていたという。

皇学館は神宮司庁内に設けられた内務省所管の官立専門学校であったが、足立巻一などのリベラルな学生も存在した。多喜二は渡辺の母校の学生を前に、社会の変革をうながす文学への情熱を意気軒昂として語ろうとした。

将来を嘱望されていた長男圭吾が一九四五年四月一日、フィリピン・レイテ島にて二三歳の若さで戦死すると、渡辺は悲嘆にくれる。戦後は八幡大学（九州国際大学）教授になるが、同校の停年をむかえた一九五八年三月、三重県津市桜橋に転居する。名古屋の石田学園や津の蛍雪学園などの予備校の講師を務めるが、まもなく脳卒中で倒れ、七年間病床に臥したまま一九六九年七月に死去する。享年七九。多喜二のことは家族に話したことがなかったというが、末娘の鬼頭正子氏によれば、父親の書棚には『蟹工船』があったという。この沈黙のなかにこそ、侵略戦争に反対して虐殺された多喜二と、侵略戦争の結果戦死した長男とに対する深い哀惜が感じられる。

（参考資料）

神宮皇学館本科二四回学籍簿コピー 皇学館館友会

「館友」第二七六号、一九三一年五月、皇学館館友会

「館友」第九一號、一九七〇年一月、皇学館館友会

「館友」第九三號、一九七〇年五月、皇学館館友会

『緑陵五十年史』、一九六四年一月、緑陵高等学校創立五十

周年記念事業協賛会

「おにし・やすみつ 本学教員」